

5 その他の魅力的な蝶

ヒメギフチョウ | アゲハチョウ科

カタクリが咲く春に出現する原始的なアゲハ類です。白神山地では、西目屋村の暗門大橋付近と深浦町の津梅川という2つの地域で発生が確認されました。このうち西目屋側は、1980年代にオクエソサイシンで発生していたのですが、1990年以降は記録がありません。いっぽう深浦側はウスバサイシン(トウゴクサイシン)で発生し、今日も健在です。



ミヤマカラスアゲハ | アゲハチョウ科

深山性のミカン科植物であるキハダが本来の食樹ですが、白神山地では低地のカラスザンショウでも発生します。このため、低地から深山まで広く生息し、湿った地面に降りて吸水する光景が観察されます。かつては、白神山地でみられる黒いアゲハ類の多くがミヤマカラスアゲハでしたが、北上侵入種であるクロアゲハの台頭で減少傾向なのが気がかりです。(ミヤマカラスアゲハの成虫は春と夏の年二回発生、クロアゲハは春夏秋の年三回発生)



黄色い口吻を伸ばして吸水するコムラサキ

コムラサキ | タテハチョウ科

オオムラサキほど大きくはありませんが、はるかに綺麗な紫光沢に輝きます。ヤナギ類で発生するため、白神山地全域に広く生息します。かつては年に一度、夏前半に出現することが多かったのですが、最近では第二世代とみられる成虫が、少ないながらも初秋にも観察されるようになりました。

オオムラサキ | タテハチョウ科

日本の国蝶として有名な大型のタテハチョウで、年に一度夏に出現します。白神山地では、赤石川、追良瀬川、笹内川などで健在で、カブトムシやスズメバチなどと同様に樹液に集まります。



樹液を奪い合うオオムラサキとスズメバチ

アイノミドリシジミ | シジミチョウ科

初夏の早朝に、ミズナラ林を舞う樹上性のシジミチョウです。羽化(蛹からハネのある成虫になること)の直後は虹色ですが、翅が伸びると緑色に輝きます。



蛹から羽化した直後のアイノミドリシジミ

クジャクチョウ | タテハチョウ科

成虫の姿で冬を越す越冬タテハです。越冬から覚めた成虫が早春イラクサ科植物に産卵し、その卵から育った成虫が第一世代として初夏に出現。さらに交尾・産卵されて育った成虫が、第二世代として初秋に出現します。こうして初秋に出現した第二世代成虫が、越冬世代となります。



白神山地ビジターセンターだより

SHIRAKAMI

特集

白神山地の蝶たち

津軽昆虫同好会 工藤 忠

No.

43

2023冬号

1

白神山地の重要種

フジミドリシジミ | シジミチョウ科

日本の蝶で唯一ブナを食樹とする樹上性のシジミチョウで、成虫は初夏に出現します。豊かなブナ林に恵まれた白神山地には広く生息しますが、全国的にはとても稀な存在です。フジミドリシジミの生活史は、1981年に昆虫研究で青森県文化賞を受賞した平川市の下山健作先生(1909-1989)によって解明されました。



ツマジロウラジャノメ | タテハチョウ科

目も眩むほどの断崖絶壁にひそむ神秘的な蝶で、深山部では年一回7月頃、低山部では年二回6月下旬と8月下旬に出現します。食草であるヒメノガリヤスは至る所で見かけるイネ科植物ですが、ツマジロウラジャノメは適度に湿った断崖に生えたヒメノガリヤスでしか発生できません。発生可能な断崖が限定的なために、昔から極めて稀な蝶として知られ、今日の青森県では白神山地の数地点でのみ細々と生息しています。



オオゴマシジミ | シジミチョウ科

崩壊斜面に自生するクロバナヒキオコシ(シソ科)が蕾をつける盛夏に成虫が出現し、この植物の蕾や花に産卵します。孵化した幼虫は当初、クロバナヒキオコシの花を食べる花食性ですが、やがて瓦礫に埋もれた朽木内で営巣するクシケアリ類の巣に運び込まれ、翌年の初夏までこの蟻の子供(蟻の幼虫)を捕食する肉食性へと変貌します。このためオオゴマシジミは、これらの条件すべてが揃った崩壊斜面でしか発生できません。世界遺産に登録される前の弘西林道時代には、一ツ森峠の旧岩崎村側に、オオゴマシジミが生息する広大な崩壊斜面がありました。世界遺産登録後は、白神ラインとして弘西林道の整備が始まりました。一ツ森峠付近の生息地は、危険箇所だったために見事なまでに改変され、現在は跡形もありません。それでも航空写真を分析すると、到達困難な地滑り地形のいくつかは、クロバナヒキオコシとみられる植物群落が散見されます。白神のオオゴマシジミは、おそらく太古から、こうした地形の変化を渡り歩いてきたはずで、近年生存が確認されているのは、西目屋側の一地点だけですが、実際には人目につかない生息地が点在していると思います。

白神山地ビジターセンター

〒036-1411 青森県中津軽郡西目屋村大字田代字神田61-1

TEL.0172-85-2810 FAX.0172-85-2833

HP <https://www.shirakami-visitor.jp/>



ホームページ



ツイッター



フェイスブック



インスタグラム



2 温暖化による北上侵入種

世界遺産に登録される以前は分布しなかった蝶が3種、今日の白神山地では確認されています。どれも皆、温暖化や人間生活の変化に伴う北上侵入種です。

ヤマトシジミ | シジミチョウ科

日本列島日本海側におけるかつての北限は、秋田・山形の県境に位置する象潟でした。象潟は、松尾芭蕉が「奥の細道」で訪れた最北の地。このため当時は、芭蕉もヤマトシジミも、象潟から北には無縁なのだと言われていました。食草は、どこにでも生えている雑草のカタバミなので、象潟より北へ侵入できないのは温度不足によると見られていました。ところが、1990年代に入ると秋田県内での北上が認められ、2000年には深浦町に到達。侵入初期には、斑紋異常個体の多発という特殊現象が勃発しました。分布拡大はその後進み、侵入22年目となる現在は、青森県全域だけでなく北海道南端部にまで拡散しています。



ヤマトシジミの異常斑紋♀(左)に求愛する正常斑紋♂(右)



ウェスバ権山のヤマトシジミ

アオスジアゲハ | アゲハチョウ科

常緑広葉樹であるタブノキを食樹とする暖地性のアゲハ類です。ただし、東北地方日本海側のタブノキは、象潟以南と白神山地西岸にしか自生地がありません。かつてアオスジアゲハは、象潟以南に分布していました。ところが、秋田市近郊におけるタブノキの植栽が、温暖化によるアオスジアゲハの北上拡散を後押しして、2007年には白神山地西岸へ到達しました。私がアオスジアゲハを初めて見たのは、2005年のマレーシア。2006年に訪れたインドネシアの首都ジャカルタでは、市街地で一番多い蝶がアオスジアゲハでした。尖った翅(昆虫のハネは、羽ではなく翅と表記します)で、ビュンビュン素早く連なりながら飛び交う光景は、いかにも熱帯の蝶。なのにこの蝶が、2007年以降は白神山地西岸で発生を繰り返しているのです。白神山地が世界遺産に登録された1993年当時、どんなに温暖化が進んでも侵入なんて考えにくいと言われたアオスジアゲハ。今日の白神山地西岸を飛ぶアオスジアゲハは、日本はもちろん、世界最北のアオスジアゲハです。



ヤブガラシで吸蜜するアオスジアゲハ



深浦の上空を3匹で連飛するアオスジアゲハ



ネムノキに訪花したクロアゲハ

クロアゲハ | アゲハチョウ科

秋田県中部を北限としていたクロアゲハは、カラスザンショウ、キハダ、カラタチといった各種のミカン科植物を食樹として発生します。このため、1990年代に入ると秋田県北部で散見されるようになり、1995年には青森県への侵入が確認されました。今日では青森県全域に拡散し、最も多くみられる黒いアゲハ類がクロアゲハという状態です。

3 もともと生息していた暖地性の蝶

白神山地の西麓には、対馬暖流の影響で暖地性植物であるアワブキが自生し、この植物で発生するスミナガシとアオバセリが分布します。これら2種は、昨今の温暖化による北上侵入種とは異なり、白神西麓にもともと生息していた蝶です。



スミナガシの赤い口吻

スミナガシ | タテハチョウ科

蝶らしからぬ和名は、流水に墨を落として模様の変化を楽しんだ平安時代の宮廷遊び「墨流し」に由来します。年に二度、春と夏に出現し、真っ赤なストロー(口吻)を延ばして樹液を吸います。

アオバセリ | セセリチョウ科

年に二度、春と夏に出現する暖地性のセセリチョウで、しびい深緑に輝きます。日の出前や日没後の薄暗い時間帯に活動します。



ノブドウを訪花したアオバセリ

4 渡りをする蝶



アサギマダラ | タテハチョウ科

春から夏にかけて南方から気流に乗って北上し、世代を重ねながら、秋には南へと渡ることがマーキング調査で判明しています。これまでに判明した最長移動距離は約2500キロで、2011年10月10日に和歌山県でマーキング放蝶された個体が、83日後の12月31日に香港で再捕獲された記録が公表されています。白神山地では、春に南方から飛来してカガイモ科植物に産卵している個体や、夏から秋にかけてヒヨドリバナやアザミ、サラシナショウマなどで吸蜜する個体が観察されます。夏以降の個体は、春に青森県内で産卵されて成長したものと、南方から飛来したものとが混在していると考えられます。

